

Q文書の研究史

山田 耕太

1. はじめに

19世紀以来Q文書は、ドイツ語の「資料」(原義は「泉」)の頭文字から“Q”と略され、「資料」(Quelle, Source)と呼び慣わされてきたが、現在では一般的に「言葉資料」(Logienquelle, Sayings Source)⁽¹⁾と言われている。

だが、最近では一方で、北米を中心にして「物語福音書」(The Narrative Gospel)に対して「言葉福音書」(The Sayings Gospel)⁽²⁾と呼ぶ傾向があり、「第一福音書」(The First Gospel)⁽³⁾「失われた福音書」(The Lost Gospel)⁽⁴⁾を含めて、「福音書」と称する動きがある。他方で、Qが文書資料ではなく口頭伝承であることを主張する動きもある。⁽⁵⁾

しかし、本稿ではトマス福音書の発見以来、Qの文書性が確実視されてきたこと、またQが共観福音書以前の段階ではあるが、以下で検討する修辭学的特性から見ても文書性は明らかであり、「Q文書」(The Q Document)と呼ぶことにする。以下、18世紀末から21世紀初頭に至るまでのQ文書の研究史を概観して、研究状況を見渡すことを本稿の目的とする。

2. 共観福音書問題とQ⁽⁶⁾

最初の三つの福音書(マタイ福音書、マルコ福音書、ルカ福音書)⁽⁷⁾が、似ていると同時になぜ違うのか、という共観福音書問題は、18世紀の難題であった。この問題を解決するために一つの福音書から多くの福音書に分かれたという原福音書説、⁽⁸⁾ 諸断片の伝承を集めて綴ったという断片説、⁽⁹⁾ 口頭伝承が筆記されたという伝承説、⁽¹⁰⁾ 他の福音書を用いて書いたという引用説などの諸説が出されていた。引用説の中でも、マタイ福音書が最初に書かれ(マタイ優先説)、マルコ福音書はマタイ福音書を要約し、ルカ福音書はマタイ福音書とルカ福音書を用いた、というアウグスティヌス説を復活させたグリースバッハの説は影響力があった。⁽¹¹⁾

19世紀に入ってカール・ラッハマンはマタイ福音書とルカ福音書がマルコ福音書を用いて書かれたというマルコ優先説⁽¹²⁾を主張した。さらに、クリスチャン・ヴィルケとクリスチャン・ヴァイセは互いに独立して、マタイ福音書とルカ福音書はマルコ福音書の他に、両者は共通なイエスの言

葉資料（ロギア）⁽¹³⁾を用いたという二資料説を唱えた。⁽¹⁴⁾ 19世紀後半には、ハインリヒ・ホルツマンによって二資料説は確立し、次第に受け入れられていった。⁽¹⁵⁾

20世紀以降、二資料説はほとんどの研究者によって受け入れられている。しかし、時折 그리스バツハ説の再来などが現れるが、⁽¹⁶⁾ その度毎に批判の対象とされている。⁽¹⁷⁾

3. テキスト再構築の試み

Q文書のテキストの本格的な探究はアドルフ・フォン・ハルナックによって始められた。その後、ジークフリート・シュルツ、アタナジウス・ポラク、ヴォルフガング・シェンク、ジョン・クロッペンボルグらによって試みられてきた。⁽¹⁸⁾ だが、1989年にジェームズ・ロビンソン、パウル・ホフマン、クロッペンボルグが中心メンバーとなって「国際Qプロジェクト」(IQP)を立ち上げ、その研究成果により「IQPテキスト」が順次公表されてきた。⁽¹⁹⁾ またそれに基づいて、ロビンソン、ホフマン、クロッペンボルグが編集者として改訂した決定版が「Q批評版」(The Critical Edition of Q)である。⁽²⁰⁾

4. 資料研究

アドルフ・フォン・ハルナックはQ文書のテキストの再構成を試みると共に、Q文書の語彙、文法、文体などの文学的特徴の傾向を抽出した。また、「それは何の脈絡も形式もない単なる言葉や演説の羅列ではない。むしろそれは始めと結びから（終末論的説話）、事柄と時系列的順序の概要のある定まった配列があることを知る」。またその間に「イエスの教え」(Λόγοι Ἰησοῦ)が挟まれていると考えた。⁽²¹⁾

Q文書のテキストの配列について、ヴィンセント・テーラーはルカ福音書の配列がQ文書のオリジナルの配列を原則的に保存していることを明らかにし、⁽²²⁾ それ以来、Q文書の章節はルカ福音書の章節を用いて表記する慣わしとなった。

Q文書がマルコ福音書と重複する箇所に関しては、Q文書がマルコ福音書に依っている⁽²³⁾ のでもなく、マルコ福音書がQ文書に依っているのではない。⁽²⁴⁾ 両者が共通の伝承に依っているのである。⁽²⁵⁾ だが、その中でもQ文書の方がマルコ福音書よりも古い発展段階を示している。(例、Q10:4, cf. マルコ6:8-9)。

トマス福音書とQ文書の関係は、トマス福音書の中にQ文書の伝承より

古い伝承層があるという立場もあるが、⁽²⁶⁾ トマス福音書は1世紀のQ文書の伝承の展開である。⁽²⁷⁾

5. 様式史研究

20世紀初頭に様式史を新約学に導入したルドルフ・ブルトマンは、最初にQ文書は原始キリスト教共同体の形成と足跡を見る唯一の窓と位置づけた。すなわち原始キリスト教は終末論的基調の中で誕生したが、やがて終末の遅延の問題にも直面し、神の国と現世（教会）の二重性の扶間の中で生きていくと見た。⁽²⁸⁾ またQ文書は原始キリスト教の産物であり、基本的に「鍵言葉」や同じテーマによって繋がれた通時的に集積された伝承であり、最終的な編集者の役割は極めて小さいと考えた。⁽²⁹⁾ このような見方は、基本的には20世紀前半に支配的で、後に至るまで多大な影響を与えた。

ブルトマンは『共観福音書伝承史』の中で、Q伝承を基本的には「ロギア（知恵の言葉）」と「預言的・黙示的言葉」に分けた。これはその後の編集史研究に基本的な枠組みを提供した。⁽³⁰⁾

6. 編集史研究⁽³¹⁾

しかし、1950年代に入ると編集者の役割を重視する編集史が台頭してきた。ハインツ・テートはQ文書が従来考えられてきたような復活信仰を補う倫理的勧告ではなく、「人の子」キリスト論とその権威を提示する、十字架・復活とは独立したケリュグマを持つことを明らかにした。また、⁽³²⁾ ジェームズ・ロビンソンはQ文書の文学類型がトマス福音書と同様に「知恵の言葉」（λόγοι σοφῶν）であると主張した。⁽³³⁾

これらと関連して、ディーター・リュールマンは、ブルトマンの伝承の「収集」（Sammlung）と「編集」（Redaktion）の区別の概念を採用して、「この世代」に対する敵対的なモチーフと「裁き」の宣言（Q 3:7-9, 17, 7:18-33, 11:14-32, 39-52）は「編集」によるもので、それ以前の伝承の「収集」（Q 6:20-49, 11:33-36, 12: 2-7, 22-34）とは異なる層であり、また編集上の創作（Q10:12, 11:30, 51; 11:19?）があることも指摘した。⁽³⁴⁾

ジークフリート・シュルツは、「パレスティナのキリスト教」対「ヘレニズムのキリスト教」という地理的概念を用いて、パレスティナ・シリア周辺地域の預言者的・終末論的・熱狂的な最古層のケリュグマを抽出し、シリアのヘレニズム共同体のケリュグマの伝承から区別して伝承を二層に分けた。また、詳細は述べなかったが最終の編集を考えた。⁽³⁵⁾ しかし、これはブルトマンのケリュグマの概念と地理的概念の中に留まっていた。

それに対して、アーランド・ヤコブソンは、「文学的統一性」を基本にして内部構造の「不一致」の部分に注目して伝承と編集を区別し、三段階の編集を考えた。第一の「構成段階」の編集では、例えば洗礼者ヨハネとイエスを「知恵」の伝達者として並置し、第二の「中間段階」の編集では、例えば洗礼者ヨハネとイエスと区別し、第三の最終段階の編集で、誘惑物語などを追加したと考えた。そして、最古層ではイエスが「知恵」の伝達者であることを強調した (7:31-35, 11:47-51, 11:29-32, 13:34-35)。⁽³⁶⁾

また、ディーター・ツェラーは知恵の言葉による複合的な訓戒が七つあることを指摘した。すなわち、①敵対者に対する振舞 (Q6:(20-23), 27-33, 35c, 36-38, 41-42(43-49))、②宣教者の振舞 (10:2-8a, 9-11a, 12(16))、③祈りについて (11:(2-4), 9-13)、④迫害時の振舞 (12:(2-3), 4-9(10))、⑤所有に対する態度 (12:22-31, 33-34)、⑥目を覚ましていること (12:(35-37?), 39-40, 42-46)、⑦終末への振舞 (17:23-24, 37, 26-27, 30, 34-35) である。⁽³⁷⁾

ジョン・クロッペンボルグは、以上の編集史的研究を総合して、最古層にツェラーの①から⑤とほぼ同様な知恵の言葉を想定したが、ツェラーの黙示的・終末論的な言葉⑥⑦を⑥神の国に入る言葉群に差し替えた (Q¹)。すなわち、演説形式でキリスト教徒に向けて対内的に書かれた①イエスの宣教開始の説教 (Q6:20b-23b, 27-49)、②弟子と派遣の説教 (9:57-60, (61-62); 10:2-11, 16,(23-24?))、③祈りについて (11:2-4, 9-13)、④恐れずに宣教する勧め (12:2-7, 11-12)、⑤思い煩いについて (12:22b-31, 33-34)、⑥狭い門 (13:24, 14:26-27, 17:33, 14:34-35) である。続いて、リュールマンらと同様に「裁き」の宣告や「この世代」に対する敵対的モチーフによる編集層 (Q²) を考えた。すなわち、クレイア形式でキリスト教徒以外に向けて対外的に書かれた①洗礼者ヨハネの悔い改めの説教 (3:(2-4), 7-9, 16b-17)、②百人隊長の僕の癒しと洗礼者ヨハネの問い合わせ (7:1-10, 18-28, 31-35, 16:16)、③「この世代」との論争 (11:14-26, 29-32, 33-36, 39-52)、④黙示的言葉 (17:23, 24, 26-30, 34-35, 37) である。これに、リュールマン、ヤコブソン、ツェラーと同様に最後の段階で誘惑物語を加えたとしたが、それは伝記への道を歩み出したと考えた。こうして、クロッペンボルグは、ロビンソンの「知恵の言葉」というやや曖昧な概念をさらに展開させて、Q文書の最古層は「知恵の言葉の教え」であると明確にした。⁽³⁸⁾ しかし、それはどのような内部のミクロ構造をもち、どのようなマクロ構造の中に置かれているのだろうか。

「知恵の言葉の教え」の内部構造については、ロナルド・バイパーが、

「求めについて」(Q11:9-13)、「思い煩いについて」(Q12:22-31)、「裁きについて」(Q6:37-42)、「木と実について」(Q6:43-5)、「告白について」(Q12:2-9)の五例を「二重の伝承の警告」と称し、また似た構造の警告を分析した。その結果、これらには①一般的な勧めの言葉、②それを支持する格言、③しばしば二重の修辭疑問による新しいイメージの提供、④冒頭の一般的な勧めの言葉を特定の問題に具体化する結びの言葉で構成されていることを明らかにした。しかし、この五例の他にこの構造を指摘することができず、パイパーの構造分析は「知恵の言葉の教え」の一部しか解明できない限界があった。⁽³⁹⁾

以上はQ文書が、伝承の収集と編集作業の結果、いくつかの伝承・編集層が折り重なっていることを前提にした研究であった。しかし、佐藤研はこれらの見方とは異なって、単独の伝承がクラスター群を形成した後に、「編集A」「編集B」「編集C」の三段階の編集作業を経て、それらがルーズリーフ式ノートのように追加されて形成されたと考えた。すなわち、「編集A」(Q3: (2-4?), 7-9, 16-17, (21-22), (3:21-22), 6:20b-49, 7:1-2, 6b-10, 18-28)では、洗礼者ヨハネで「包摂」され(Q3:7-9, 16-17; 7:18-28)、その中には「来たるべき者」(3:16; 7:19)、「荒野」(3:3; 7:24)、「神の国」(6:20b; 7:28)、「貧しい人」(6:20b; 7:22)などの対応関係が見られる。「編集B」(9:57-60, 10:2-12, 16,21, 23-24)では、アポテグマで「包摂」され(9:57-58; 10:21-24)、弟子派遣の試みは感謝の祈りと対応し(10:5-6,9; 10:21)、「祝福の言葉」で結ばれる(10:23-24)。「編集A」にQ7:31-35が加えられると「人の子」(7:34; 9:58)を介して「編集B」と結びつけられる。さらに「編集C」の特徴としてイスラエルの民全体に対する批判と裁きのモチーフと「神の知恵」のモチーフが見られ、奇跡を求める「この世代への批判」(11:14-32)、「ファリサイ派・律法学者への災いの言葉」(11:39-52)、「弟子たること」(13:23-35)、「告白と思い煩いについて」(12:2-34)、「人の子の到来について」(17:23-37)などがその中に加えられていったと考えた。また、佐藤はQ文書をミクロ構造として「告知文」(Ankündigung)、「災いの言葉」(Unheilswort)、「救いの言葉」(Heilswort)、「叱責の言葉」(Schetwort)、「禍の叫び」(Weheruf)などに特徴づけられる「預言書」に位置づけた。⁽⁴⁰⁾

編集史の時代にQ文書の核心は「知恵」か「預言」か、その文学類型は「知恵の言葉の教え」(クロッペンボルグ)か、「預言書」(佐藤)か、と問われてきた。だが、クロッペンボルグに代表されるようにQ¹は知恵の言葉の層、Q²は預言・黙示の言葉の層というように「知恵」と「預言」の伝承

層を分けることはできない。⁽⁴¹⁾ Q文書には「知恵」と「預言」の両面が含まれているのである。さらに様式史・編集史の研究史が、原始キリスト教文学は「小文学」(Kleine Litaratur)である、というフランツ・オーファベックの文学観⁽⁴²⁾に規定されてきたことをアラン・カークは正しく指摘している。⁽⁴³⁾しかし、1980年代以降には、例えば一方では福音書の文学類型(文学ジャンル)の問題ではギリシア・ローマの「大文学」(Grosse Literatur)と同じ文学類型が問われており、他方では文学スタイルや文学構造の問題で修辭学的批評が隆勢となっていて、問題意識を共有するにせよしないにせよ、新約聖書が教父文学と同様に「大文学」として取り扱われていることは、研究状況から見てもほぼ明らかである。⁽⁴⁴⁾

7. 社会学的・社会史的研究

社会学の視点で新約聖書を分析する文学社会学を導入したゲルト・タイセンは、「ワンダーラディカリズム」で、最初期のキリスト教を形成したイエス運動がQ文書の弟子派遣説教に見られるように、無一物に近い宣教者とそれを支援する信者によって構成されたカリスマ運動であることを明らかにした。⁽⁴⁵⁾

さらに、タイセンはパレスティナの社会・政治史の中で、皇帝カリギュラ時代の紀元40年代に起きたローマの総督ペトロニウスによるエルサレム神殿に対する冒涇という出来事によってQ文書が著作されたと位置付けた。これに対して、クロッペンボルグのQ文書の三層説(Q¹, Q², Q³)を前提にしたマッティ・ミリコフスキーは、紀元66-70年のユダヤ戦争によってQ文書は書かれたと位置付けたが、これは他の福音書などで記されているユダヤ戦争を示唆する記述がQ文書には見られないので、年代設定としては遅すぎる。⁽⁴⁶⁾

また、ジョナサン・リードはQ文書に現れる地名の研究から、Q文書は社会地理学的に見てカファルナウムを中心にしたガリラヤ地方で最近に都市化された農村地域の共同体から生み出され、その背景にはガリラヤとエルサレム、農村と都市の対立の構図があることを示唆した。リチャード・ホースレイは、この対立の構造は、支配者層の富者である土地所有者(ユダヤ教の権力者側と重なる)と被支配者層である貧者の小作農との対立という社会・経済的な社会層の違いによる対立の構図であることを明らかにした。⁽⁴⁷⁾

8. 修辭学的研究

1980年代後半の研究では、編集史の研究でも「修辭疑問」「クレイア」

「インクルーシオ」などの修辞学的概念が用いられていた。⁽⁴⁸⁾しかし、修辞学を意識したQ研究が1990年代以降に二つ現れている。

第一は、アラン・カークである。カークはQ文書の核心を「(知恵の) 教への演説」と定義して、エジプト、旧約聖書、ギリシア・ローマ、ヘレニズム・ユダヤ教の知恵文学の「教への演説」と比較する。そして、Q文書のミクロ構造である「教への演説」として「敵愛の教え」(6:27-35)・「裁きについて」(6:37-42)・「木と実について」(6:43-45)、「確信をもった祈り」(11:2-13)・「ベルゼブル論争」(11:14-23)・「しるしを求めること」(11:29-35)、「勇気ある証言」(12:2-12)・「思い煩いについて」(12:22-31, 33-34)・「目覚めて準備すること」(12:35-46)・「時を見分けること」(12:49, 51, 53-59)・「狭い門から入ること」(13:24-30, 14:11, 16-24, 26-27, 17:33, 14:34-35)・「人の子の日を見分けること」(17:23-37)の12か所を挙げ、それらを分析した結果、次のようにその構造を明らかにする。すなわち、①勧めや格言による教えの始め—しばしばその動機や理由の言葉を伴う、②比喩・修辞疑問・範例・勧め・神的宣告・格言などによる導入のテーマに対する議論、③一般論や抽象論から各論や具体論に進んでいく特定な状況への応用、④しばしば最初のテーマへ戻る「包摂」(inclusio)を用いた、勧め・格言・範例・約束などによる教えの結びである。続いて、カークは古代の知恵文学の代表例の全体構造と比較しつつ、Q文書を構成する四つのブロック、①「宣教開始の説話」(3:7-9, 16-17, 21-22, 4:1-13, 6:20b-49, 7:1-10, 18-35)、②「宣教の指示」(9:57-60, 10:2-16, 21-22)、③「論争の説話」(10:23-34, 11:2-13, 14-23, 24-26, 29-35, 39-52, 13:34-35)、④「終末論の説話」(12:2-22:30)のマクロ構造が、対称的な「輪構造」(リング・コンポジション)すなわち「キアスムのシメトリ」を成していると分析した。⁽⁴⁹⁾重要な点はQ文書全体にわたって「演説 (speech)」と「説話 (discourse)」という視点で、そのミクロ構造とマクロ構造を分析している点である。しかし、この分析ではまだ修辞学的概念を用いた分析が不徹底であると同時に、これらの各ブロックのマクロ構造の中でのミクロ構造との関係が不明確である。

第二は、ハリリー・フレッドマンである。フレッドマンはQ文書の全体を①「ヨハネとイエス」(3:7-7:35)、②「弟子たち」(9:57-11:13)、③「敵対者」(11:14-52)、④「現在の神の国」(12:2-13:21)、⑤「将来の神の国」(13:24-22:30)の五つのブロックに分け、そのマクロ構造は①と③では「輪構造」(リング・コンポジション; ABCB'A', ABA')であるが、②では並置 (A¹A²B¹B²)、④と⑤では「包摂」(ABB'CDD'A, ABCA')である

とした。また、従来から指摘されてきた「隠喩」「直喩」「クレイア」「並行法」などの修辞学的概念を用いる他に、著者に特有な概念である「圧縮」「反復」「数的パターン」「建築的構造(＝輪構造)」などを用いるがこれらはいずれも修辞学的概念ではなく、修辞学的分析としては徹底していない。⁽⁵⁰⁾

以上から明らかなように、カークとフレグダーマンのQ文書全体のブロック分け(冒頭の第一ブロックを除く)とそのマクロ構造の分析は異なる。また、Q文書の修辞学的批評は手がつけられたばかりで、まだ本格的ではない。⁽⁵¹⁾

9. 結びに

以上、約200年以上に及ぶQ文書の研究史の重要な局面を簡潔に展望してきた。歴史学の成立と共にその手法を取り入れて新約聖書学が成立し、19世紀の共観福音書研究の資料研究の中からQ資料説が生まれた。その後、「小文学」に対する視点で視点伝承史手法を取り入れて、とりわけ編集史の研究が華やかな時代を迎えた。その時期は、想定されたものと類似のトマス福音書が砂漠の修道院跡から発見され、Q資料は仮説ではなくその存在が確実視され、Q文書やQ福音書とも呼ばれるようになった。1980年代以降は、学際的な研究が活発になると応じて社会的なアプローチ(社会学・社会史・社会人類学など)や文学的なアプローチ(修辞学、他)が取り入れられ、「大文学」に対する視点で新たな探求が始まっている。

-
- (1) E. g., A. Lindemann (ed.), *The Sayings Source Q and the Historical Jesus*, Leuven: Leuven University Press / Peeters, 2001.
- (2) E. g., J. S. Kloppenborg, "The Sayings Gospel Q: Translation and Notes," idem, *Q Thomas Reader*, Somona: Polebridge, 1990, 35-74 = J. クロップエンボルグ『Q資料・トマス福音書』日本基督教団出版局, 1990年; J. M. Robinson, "The Sayings Gospel Q," F. Van Segbroeck et al (eds.), *The Four Gospels 1992: Festschrift F. Neirynck*, vol.1, 1992, Leuven: Leuven University Press / Peeters, 1992, 361-388.
- (3) E. g., A. D. Jacobson, *The First Gospel: An Introduction*, Somona: Polebridge, 1992.
- (4) E. g., B. Mack, *The Lost Gospel: The Book of Q and the Christian Origins*, San Francisco: Harper Collins, 1993 = B. マック『失われた福音書Q』青土社, 1995年。
- (5) E. g., W. Kelber, *The Oral and the Written Gospels: The Hermeneutics of Speaking and Writing in the Synoptic Tradition, Mark, Paul, and Q*, Philadelphia: Fortress Press, 1983 (Reprint, Bloomington & Indianapolis: Indiana University Press, 1997), 201-203; J. D. G. Dunn, *Christianity in the Making: vol.1 Jesus Remembered*, Grand Rapids: Eerdmans, 2003, 173-254 ; idem, "Q¹ as Oral Tradition," M. Bockmuehl & D.A. Hagner (eds.), *The Written Gospel*, Cambridge: Cambridge University Press, 2005, 45-69. Q口頭伝承説

- に対する批判は、cf. e.g., D. Burkett, *Rethinking Gospel Sources: vol.2 The Unity and Plurality of Q*, Atlanta: Society of Biblical Literature, 2009, 45-48.
- (6) 18-19世紀の研究史に関しては、cf. J. S. Kloppenborg Verbin, *Excavating Q: The History and Setting of the Sayings Gospel*, Minneapolis: Fortress Press, 2000, 271-328; H. T. Fleddermann, *Q: A Reconstruction and Commentary*, Leuven: Leuven University Press / Peeters, 2005, 3-39.
 - (7) 1776年にヨーハン・グリースバッハがマタイ福音書・マルコ福音書・ルカ福音書の似た箇所を共に並べて観た共観表を作成して以来 (J. Griesbach, *Synopsis Evangeliorum Matthaei, Marci et Lucae*, Halle: J.J. Curtius Haerdes, 1776)、これらは「共観福音書」と呼ばれている。
 - (8) E. g., G. E. Lessing, “Neue Hypothese über die Evangelisten als bloss menschliche Geschichtsschreiber betrachtet,” *Theologischer Nachlass*, Berlin: Voss, 1784, 45-72.
 - (9) E. g., F. D. E. Schleiermacher, *Über die Schriften des Lukas: Ein kritischer Versuch*, Berlin, 1817.
 - (10) E. g., G. C. S. Gieseler, *Historisch-kritischer Versuch über die Entstehung und die frühesten Schicksale der schriftlichen Evangelien*, Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1818.
 - (11) Cf. B. Orchard & T. R. W. Longstaff (eds.), *J. J. Griesbach: Synoptic and Text-Critical Studies, 1776-1976*, Cambridge: Cambridge University Press, 1978.
 - (12) マルコ優先説は、それ以前に既に唱えられていた。Cf. J. B. Koppe, *Marcus non epitomator Matthaei*, Göttingen: Programm der Universität Göttingen, 1782; G. Ch. Storr, *Über den Zweck der evangelischen Geschichte des Johannes*, Tübingen, 1786.
 - (13) Q資料説は、それ以前に「アラム語資料説」として (J. G. Eichhorn, *Einleitung in das Neue Testament*, Leipzig: Weidmann, 1804)、続いてパピアス断片の「ロギア説」(エウセビオス『教会史』3.39.15-16) という形で唱えられていた (F. Schleiermacher, “Über die Zeugnisse des Papias von unsern beiden ersten Evangelien,” *ThStK* 5 (1832), 735-768)。
 - (14) K. Lachmann, “De ordine narrationum in evangelii synopticis,” *ThStK* 8 (1835), 570-590。Qは19世紀後半まで「ロギア」と称されていたが、シモンズ以来 (E. Simons, *Hat der dritte Evangelist den kanonischen Matthäus benutzt?*, Bonn: Carl Georgi, 1880) “Q” と称されるようになった。
 - (15) C. G. Wilke, *Der Urevangelist, oder exegetisch-kritische Untersuchung über das Verwandtschaftsverhältniss der drei ersten Evangelien*, Dresden & Leipzig: Gerhard Fleischer, 1838; C. H. Weisse, *Die evangelische Geschichte kritisch und philosophisch bearbeitet*, Leipzig, Breitkopf & Hartel 1838; H. J. Holtzmann, *Die synoptischen Evangelien: Ihr Ursprung und geschichtlicher Charakter*, Leipzig: Wilhelm Engelmann, 1863.
 - (16) E. g., W. R. Farmer, *The Synoptic Problem: A Critical Analysis*, New York: Macmillan, 1964.
 - (17) E. g., C. M. Tuckett, *The Revival of the Griesbach Hypothesis: An Analysis and Appraisal*, Cambridge: Cambridge University Press, 1983; D. Burkett, *Rethinking the Gospel Sources, Vol.2: The Unity and Plurality of Q*, Atlanta: Society of Biblical Literature, 2009, 1-32.
 - (18) A. von Harnack, *Sprüche und Reden Jesu*, Leipzig: J. C. Hinricks, 1907 =ET, *The Sayings of Jesus*, London: Williams & Norgate / New York: G. P. Putnam's and Sons, 1908; S. Schulz, *Q; Die Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich: Theologischer Verlag Zürich, 1972; A. Polag, *Fragmenta Q: Textheft zur Logienquelle*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1979; W. Schenk *Synopse zur Redenquelle der Evangelisten*, Düsseldorf: Patmos, 1981; J. S. Kloppenborg, *Q Parallels*, Sonoma: Polebridge, 1988
 - (19) *JBL*109 (1990), 499-501; *JBL*110 (1991), 494-498; *JBL*111 (1992), 500-508; *JBL*112 (1993), 500-506; *JBL*113 (1994), 495-499; *JBL*114 (1995), 475-485; *JBL*116 (1997), 521-

- 525; cf. J. M. Robinson, P. Hoffmann, & J. S. Kloppenborg (eds.), *Documenta Q: Reconstructions of Q through Two Centuries of Gospel Research*, Louvain: Peeters, 1996-.
- (20) J. M. Robinson, P. Hoffmann, J. S. Kloppenborg, *The Critical Edition of Q: Synopsis Including the Gospels of Matthew and Luke, Mark and Thomas, with English, German & French of Q and Thomas*, Leuven: Leuven University Press / Peeters / Minneapolis: Fortress Press, 2000. Cf. P. Hoffmann & C. Heil (Hrg.), *Die Spruchquelle Q: Studienausgabe Griechisch und Deutsch*, Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft / Leuven: Peeters, 2002. Q批評版に対する批判的拙訳、「Q文書のギリシア語決定版の日本語訳(1) (2)」『敬和学園大学研究紀要』第21号 (2012年)、241-252頁、同第22号 (2013年)、209-221頁、参照。
- (21) Harnack, *Sayings of Jesus*, 181, cf. 228, 235-236. 同様な見方はBultmannに影響を与えたJ. Welhausen, *Einleitung in die drei ersten Evangelien* (2. Aufl.), Berlin: Reimer, 1911, 171にも見られる。洗礼者ヨハネとイエスの終末論的説教に枠取られている見方は、T. W. Manson, *The Sayings of Jesus*, London: SCM Press, 1949 (= *The Mission and Message of Jesus: Part 2*, London: SCM Press, 1937) にも見られる。
- (22) V. Taylor, "The Order of Q," *JTS* 4 (1953), 27-31; idem, "The Original Order of Q," A. J. B. Higgins (ed.), *New Testament Essays: Studies in Memory of T. W. Manson*, Manchester: Manchester University Press, 1959, 95-118; Vassiliadis, "The Original Order of Q: Some Residual Cases," J. Delobel (ed.), *Logia Les Paroles de paroles-The Sayings of Jesus: Mémorial J. Coppens*, Leuven: Leuven University Press, 1982, 379-387.
- (23) Welhausen, *Einleitung*, 73-89; H. T. Fleddermann, *Mark and Q: A Study of Overlap Texts*, Leuven: Leuven University Press / Peeters, 1995.
- (24) Harnack, *The Sayings of Jesus*, 193-227.
- (25) R. Laufen, *Die Doppelüberlieferung der Logienquelle und des Markusevangeliums*, Bonn: Hanstein, 1980.
- (26) H. Koester, "GNOMAI DIAPHOROI," J. M. Robinson & H. Koester, *Trajectories through Early Christianity*, Philadelphia: Fortress Press, 1971 = 『初期キリスト教の思想的軌跡』、新教出版社、1975年、第4章; idem, "Q and Its Relatives," J. E. Goehring et al (eds.), *Gospel Origins and Christian Beginnings*, Sonoma: Polebridge Press, 1990, 49-63; idem, *Ancient Christian Gospels: Their History and Development*, Philadelphia: Trinity Press International / London: SCM Press, 1990, 75-171.
- (27) E. g., C. Tuckett, *Nag Hammadi and the Gospel Tradition: Synoptic Tradition in Nag Hammadi Library*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1986; 荒井献『トマスによる福音書』講談社学術文庫、1994年 (1984年)。
- (28) R. Bultmann, "Was läßt die Spruchquelle über die Urgemeinde erkennen," *Oldenburgische Kirchenblatt* 19 (1913), 35-37, 41-44 = ET "What the Saying Source Reveals about the Early Church," J. S. Kloppenborg, *The Shape of Q: Signal Essays on the Sayings Gospel*, Minneapolis: Fortress Press, 1994, 23-34.
- (29) R. Bultmann, *Die Geschichte der drei synoptischen Tradition*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht (2. Aufl.), Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1931 (1. Aufl. 1921).
- (30) R. Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition*, (2. Aufl.) Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1931 (1921), = ET *The History of the Synoptic Tradition*, Oxford: Basil Blackwell, 1968 (1963), = R. プルトマン『共観福音書伝承史 I, II』新教出版社、1983年、1987年。

- (31) 編集史に関して要を得た詳細は、cf. P. Hoffmann, “QR und der Menschensohn: Eine vorläufige Skizze,” F. van Segbroeck et al. (eds.), *The Four Gospels 1992: Festschrift Frans Neirynck*, vol.1, Leuven: Leuven University Press / Peeters, 1992, 421-456; J. S. Kloppenborg, “The Sayings Gospel Q: Literary and Straight Problems,” R. Uro (ed.), *Symbols and Strata: Essays on the Sayings Gospel Q*, Helsinki: The Finnish Exegetical Society / Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, 1-66; C. M. Tuckett, “‘Redaction Criticism’ & Q,” *Q and the History of Early Christianity: Studies on Q*, Edinburgh, 1996, 41-82.
- (32) H. E. Tödt, *Der Menschensohn in der synoptischen Überlieferung*, Gütersloh: Gerd Mohn, 1959. 「来るべき人の子」(Q11:30, 12:8, 40, 17:24, 26, 30, cf. Mk8:38, 13:26, 14:62, Mt10:23, 13:41, 19:28, 25:31, Lk12:8-9)、「地上で働く人の子」(Q6:22, 7:34, 9:58, 12:10, cf. Mk2:10, 28, 10:45, 14:21a, Mt13:37, Lk19:10)、参照。マルコ福音書に特徴的な「苦難し復活する人の子」(Mk8:31, 9:9, 12, 31, 10:33-34, 14:21b, 41)は、Q文書には見られない。注35、参照。Cf. H. Schürmann, “Beobachtungen zum Menschensohn-Titel in der Redequelle,” R. Pesch & R. Schnackenburg et al (Hrg.), *Jesus und der Menschensohn: Für Anton Vögtle*, Freiburg: Herder, 1975, 124-147=*Gottes Reich: Jesu Geschichte Jesu ureigener Tod im Licht seiner Basilea- Verkündigung*; Freiburg: Herder, 153-182.
- (33) J. M. Robinson, “ΛΟΓΟΙ ΣΟΦΩΝ: Zur Gattung der Spruchquelle Q,” E. Dinkler (Hrg.) *Zeit und Geschichte: Dankesgabe an Rudolf Bultmann*, Tübingen: Mohr (Siebeck), 1964, 77-96; idem, “ΛΟΓΟΙ ΣΟΦΩΝ: On the Gattung of Q,” J. M. Robinson & H. Koester, *Trajectories*, 20-70=『思想的軌跡』、第3章。
- (34) D. Lührmann, *Die Redaktion der Logienquelle*, Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1969. Cf. P. Hoffmann, *Studien zur Theologie der Logienquelle*, Münster: Aschendorf, 1972.
- (35) S. Schulz, Q; *Die Spruchquelle der Evangelisten*, Zürich: Theologischer Verlag Zürich, 1972. パレスティナの最古層として①イエスの説教 (Q6:20bc, 27-36-38, 41-42)、②祈りについて (11:1-4, 9-13)、③ファリサイ派・律法学者への災いの言葉 (11:39, 42-44, 46-48, 52)、④告白について (12:4-7,8-9)、⑤思い煩いについてなど (12:22-31, 16:17-18) を抽出し、ヘレニズムの新しい層として①地上のイエスへの関心 (4:1-13, 7:1-10, 18-28, 10:21-22, 11:14-23, 29-32, 12:10, 12:51-53, 16:16)、②終末の遅延 (6:43-45, 47-49, 12:39-40, 42b-46, 13:18-21, 23-24, 17:3-4, 17:23-24, 26-27, 30, 34-35, 37, 19:12-27)、③イスラエルへの裁き (3:7-18, 10:13-15, 11:49-51, 13:28-29, 34-35, 22:28-30)、④徴税人・罪人を迎えること (7:31-35, 14:16-24, 15:4-7)、⑤イエスに従うことと共同体への関心 (6:22-23, 39, 40, 46, 9:57-60, 10:2-12, 16, 23-24, 11: 24-26, 33, 34-35, 12:2-3, 11-12, 57-59, 13:26-27, 14:26, 27, 34-35, 16:13, 17:5-6, 33, 18:14) を分けた。
- (36) A. D. Jacobson, “Wisdom Christology in Q,” Ph. D. Thesis: Claremont Graduate School, 1978. またそれを発展させた, idem, *The First Gospel: An Introduction to Q*, Sonoma, Polebridge Press, 1992. 「構成段階」の編集は、①洗礼者ヨハネとイエス (Q3:1-6, 7-9, 16abd, 17; 6:20b-23ab, 27-49; 7:1-10; 7:24-27, 16:16, 7:31-35)、②弟子派遣の説教 (9:57-60, 10:2-16)、③「この世代」への批判 (11:14-20, 23; 11:29-32, 24-26, 33-35; 11:39-52) で構成され、「中間段階」の編集に①洗礼者ヨハネのイエスへの従属 (3:16c, 7:18-23, 28)、②親密者への啓示 (10:21-22, 11:2-4, 9-13, 17:5-6)、③熱心さ (11:2-4, 9-13, 17:5-6)、④告白と思い煩い (12:2-12, 22-34) が加わり、最終段階の編集で誘惑物語 (4:1-13) が追加されたと考えた。
- (37) D. Zeller, *Die weisheitlichen Mahnsprüche bei den Synoptikern* (2. Aufl.), Würzburg:

- Echter Verlag, 1983 (1. Aufl. 1977), 191; idem, "Eine weisheitliche Grundschrift in der Logienquelle?," Segbroeck et al (eds.), *The Four Gospels: 1992*, 389-401. Zellerの七つの最古層の伝承のうちの四つは(①③④⑤)、Schulzの最古層(①②④⑤)と共通である。
- (38) J. S. Kloppenborg, *The Formation of Q: Trajectories in Ancient Wisdom Collections*, Philadelphia: Fortress Press, 1987, 102-262. Kloppenborgの六つの最古層の伝承のうち四つは(①③④⑤) Schulzの最古層(①②④⑤)と共通である。その後1995年には、⑤にQ13:18-21を加え、新たに最古層にQ15:4-7, 8, 10; 16:13, 16, 18, 17:1-2, 3-4, 6を加えた、J. S. Kloppenborg, *Excavating Q: The History and Setting of Saying Gospel*, Minneapolis: Fortress Press, 2000, 146 n. 62.
- (39) R.A.Piper, *Wisdom in the Q-Tradition: The Aphoristic Teaching of Jesus*, Cambridge: Cambridge University Press, 1989, 14-99.
- (40) M. Sato, *Q und Prophetie: Studien zur Gattungs- und Traditionsgeschichte der Quelle Q*, Tübingen, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), 1988, 33-46, 116-313. Cf. Schürmann, "Beobachtungen."
- (41) C. M. Tuckett, "On the Stratification of Q: A Response," J. S. Kloppenborg & L. E. Vaage (eds.), *Early Christianity, Q and Jesus* (Semeia 55), Atlanta: Scholars Press, 1991, 213-232; R. Horsley, "Logoi Prophētēn?: Reflections on the Genre of Q," R.A. Pearson (ed.), *The Future on Early Christianity: Essays on Honor of H. Koester*, Minneapolis: Fortress Press, 1991, 195-209; G. Theissen, *The Gospel in Context: Social and Political History in the Synoptic Tradition*, Edinburgh: T. & T. Clark, 1992, 205; 拙論「Q文書における洗礼者ヨハネに関する説教の修辞学的分析」『聖書学論集第46号：三教授献呈論文集(仮題)』2014年、所収。
- (42) F. Overbeck, "Über die Anfänge der patristischen Literatur," *Historische Zeitschrift* 48 (1882), 417-472.
- (43) A. Kirk, *The Composition of the Saying Source: Genre, Synchrony, and Wisdom Redaction in Q*, Leiden: Brill, 1998, 1-86.
- (44) 拙論「新約学の新しい潮流—修辞学的批評」『福音と世界』2012年7月号、38-42頁、拙著「第2部 研究史の潮流」『フィロンと新約聖書の修辞学』87-118頁、参照。
- (45) G. Theissen, "Wanderradikalismus: Literatursoziologische Aspekte der Überlieferung von Worten Jesu im Urchristentum," *ZThK* 70 (1973), 245-271 = idem, *Studien zur Soziologie des Urchristentums*, (2. Aufl.) Tübingen: J. C. B. Mohr, 1983 (1979), 79-105.
- (46) G. Theissen, *The Gospel in Context*, 203-241; M. Myllykoski, "The Social History of Q and the Jewish War," R. Uro (ed.), *Symbols and Strata*, 143-199.
- (47) J. L. Reed, "The Social Map of Q," J. S. Kloppenborg (ed.), *Conflict and Invention: Literary, Rhetorical, and Social Studies on the Saying Gospel Q*, Valley Forge: Trinity Press International, 1995, 17-36; R. Horsley, "Social Conflict in the Synoptic Sayings Source of Q," J. S. Kloppenborg (ed.), *Conflict and Invention*, 37-52.
- (48) E.g., J. S. Kloppenborg, *Formation*, 289-316, 322-328; idem (ed.), *Conflict and Invention*; idem, *Excavating Q* 196-213.
- (49) Kirk, *The Composition of the Saying Source*, 87-407.
- (50) Fleddermann, *Q*, 79-871, esp. 79-128.
- (51) カークとフレッドーマンに対して批判を加えた上で、Q文書の徹底した修辞学的分析については、拙論「Q文書における洗礼者ヨハネに関する説教の修辞学的分析」注41、「Q文書における宣教開始説教の修辞学的分析」『敬和学園大学研究紀要』次号、掲載予定、参照。